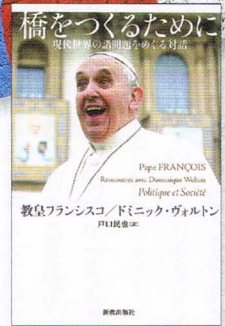


対話は人を成長させ、伝統を成長させる

教皇フランシスコの ダイナミズム

戸口民也



●とぐち・たみや

1946年生まれ。早稲田大学大学院仏文科修士課程修了。長崎外国語短期大学、長崎外国語大学で、フランス語・フランス文学などを40年にわたって教えた。専攻分野はフランス17世紀演劇。

対話は文化と文化を つなぐ橋

まず筆者が翻訳した『橋をつくるために』(現代世界の諸問題をめぐる対話)(新教出版社、二〇一九年五月刊)についてご紹介したいと思っています。

二〇一六年二月から翌二〇一七年二月まで十二回にわたって行われた、教皇フランシスコとフランスの社会学者ドミニック・ヴォルトンとの対話をもとにまとめられた本です。

原題は『政治と社会』ですが、少し「ぶっきらぼう」すぎるのではという意見が出版社から示されました。たしかにそのとおりで、どんな内容の本かもわかりにくいのです。そこで邦訳では題名を『橋をつくるために』としました。たしかにこのほうが、教皇フランシスコの考えも、本の内容も、よく伝わると思っています。

「橋をつくる」という言葉は、この本のなかでも教皇フランシスコがしばしば口にして重要なキーワードです。教皇の考えや姿勢をよく表す言葉でもあります。たとえば教皇は次のように語っています。

政治の要件はそばに寄り添うことです。(…)教会は、政治においては、橋をつくることによって奉仕しなければなりません……それが教会の役割です。

わたしたちの模範であるイエス・キリストにならって、橋を架けねばなりません。イエス・キリストは父なる神から『Pontifex』——橋をつくる人——となるために遣わされました。わたしの考えでは、まさにそこに教会の政治活動の基本があります。

また、「グローバル化する今日の世界に対して教会はどのような貢献ができるのでしょうか？」というヴォルトンの問いに対して、教皇はこう答えています。

対話によってです。対話なしでは、今日、何も可能とは思えないとわたしは思います。ただし、誠実な対話であること、たとえ面と向かって不愉快なことを言わねばならないとしてもです。(…)対話は文化と文化のあいだの「大きな橋」です。

現代世界が抱えている問題とどう向き合うべきか

私がなぜこの本を訳したのかというと、それは教皇フランシスコを、カトリック信者はもちろんのこと、信仰をもって生きている人たち、さらには宗教とかわりなく生きている人たちにも、広く紹介したかったからです。

残念ながら日本では、キリスト教・カトリック・バチカン・教皇についてジャーナリズムで話題になることはほとんどありません。たまに取り上げられることがあっても、客観的で公正な情報というよりは、ネガティブな……しかも往々にして悪意や敵意のフィルターがかかった情報が無責任に流されるのがまます。誤解や

先入観からくる間違った情報もしばしば見かけます。

こうした状況を少しでも改善するには、素顔の教皇の姿がよくあらわれているこの本を読んでもらうのが一番だろう、そう私は考えました。

ヴォルトンとの対話を通じて、また各章の最後に収められた教皇の演説を通じて、教皇フランシスコの人柄、考え、姿勢、行動がとてわかりやすく、しかも説得力をもって示されているからです。

この本を翻訳しようと思った理由はもう一つあります。教皇とヴォルトンとの対話は、現代世界が抱えている問題は何か、問題とどう向き合えばよいのかを考えるための、よき助けとなるからです。そして問題に取り組むときの第一歩となるのが「橋をつくる」と、対話・コミュニケーションを行うことであるということが、とてもわかりやすく伝わってくると感じたからです。

道は歩くことでつくられる

では、「橋をつくる」ためには



う……。

どうすればよいのでしょうか？
自分の内に閉じこもらず、外に出て行くこと、歩き始めることだ、そう教皇フランシスコは言います。

とにかく歩くのです。間違えながら、それでも歩くのです。コミュニケーションするのです。

ものを見方を考え直す

人間の尊厳には、必然的に「道を行く」という意味が含まれています。道を行っていない人はミイラです。博物館の展示品です。その人は生きてはいません。(…)道を「行く」だけでなく、道を「つくる」のです。「道は歩

くことでつくられる」からです。そして、歩くとは、他の人々とコミュニケーションすることです。人は歩くとき、出会います。歩くことは、たぶん、出会いの文化の基本でしょう。人がもう歩かないと決めたとき、失敗します。人としての召し出しにおいて失敗するのです。歩き、常に道を行くことは、常にコミュニケーションすることです。道を間違えることもあるだろうし、倒れることもあるでしょう。

翻訳作業のなかで、ひとつ印象深く感じた言葉があります。それは、「伝統とは動くものです」という言葉です。教皇フランシスコはこう言っています。



伝統は進んでいく、でもどんなふうにしてでしょう？年月と共に固められ、時間と共に成長し、時代と共に純化される、というふうにです。伝統の基準は変わりません、本質は変わりません、でも、成長し、進化するのは、

これは、教皇フランシスコの考

え方だけでなく、カトリック教会の基本的な姿勢をよく表現する言葉でもあります。さらに言えば、私たちが自身のものの見方を考え直すよう招く言葉でもあります。

たとえば死刑について、ヨハネ・パウロ二世もベネディクト十六世も死刑は廃止されるべきだと訴えてきました。教皇フランシスコはさらに一歩進んで、「たとえ重大な罪を犯したとしても、死刑は許容できません。それは

人格の不可侵性と尊厳への攻撃だからです」と確認し、『カトリック教会のカテキズム』の死刑の項目（二二六七項）を改定しました。改定された項目の最後にはこう記されています「教会は（…）全世界で死刑が廃止されるために決意をもって取り組みます」

伝統が変わったというところでしょいか？いいえ、意識が変わったのです、道

徳に関する意識が進歩したので

そう指摘しつつ、教皇フランシスコはさらに言葉を続けざま

ダイナミックな伝統においては、本質はそのまま変わりません、でも成長するのです。成長してより明確なものとなり、理解が深まるのです。（…）対話は人を成長させます、伝統を成長させます。対話することによって、別の意見に耳を傾けることによって（…）自分の見方を変えることができるのです。

硬直した態度はいけません、伝統をイデオロギーにしてはいけませんと教皇はしばしば警告します。

「新しさ」 教皇フランシスコの

教皇フランシスコは新しい時代

の新しい教皇だといわれることがよくあります。たしかにそうです。時のしるしを見極め、時代が抱えている問題を正面から見据え、問

題をどうとらえ、どう対処すべきかを、誰にもわかるような「簡潔かつ直接的な言葉、ときとして挑発的な言葉」（ヴォルトン）で何度でも訴えかける……そこにフランシスコ教皇の「新しさ」があることは確かでしょう。

型にはまらない独自の表現スタイルで語り、行動する教皇の姿勢、貧しく弱い人々・社会から排除された人々のなかに身を投じ、寄り添う教皇の姿勢は、教会のあり方を刷新するダイナミズムを感じさせるものです。

とはいえ、伝統からの逸脱では決してありません。キリストの教えの本質をしっかりと守りながら、ヨハネ二十三世、パウロ六世、ヨハネ・パウロ二世、ベネディクト十六世が切り拓いてきた地平を継承しているのです。そして、さらなる発展を目指し、教会の伝統を新しい時代によりふさわしいものとなるよう成長、進化させるために、歩き続けているのでしよう。

行く先々で「橋をつくる」ことを自分の使命とする人、それがフランシスコ教皇であると私は考えています。